

# 私たちの世代で真のジェンダー平等の実現を

三輪 敦子

2020年は、ジェンダー平等にとって大切な節目の年である。1995年の第4回世界女性会議（北京）から25年（北京+25）、「女性と平和・安全保障」を取り上げた国連安全保障理事会決議1325号採択から20年、国連の女性関連4機関を統合したUN Women 設立から10年にあたる。また、2030年を達成期限に採択されたSDGs（持続可能な開発目標）は実施5年目を迎える。

北京行動綱領採択後25年間の最も重要な進展として挙げられるのは、「ジェンダーに基づく暴力」への理解と取り組みだろう。女性差別撤廃条約採択時に「ジェンダーに基づく暴力」が明文化されていなかったことが如実に示しているように、ジェンダー平等に関しては、「不可視化されてきた課題」「意識できなかった課題」がたくさんある。それらに気づくこと、その影響の深刻さを理解することが重要である。近年、女性差別撤廃委員会が「性別役割に関する有害な規範・固定観念・偏見・慣行の撤廃」を強調しているのは、法律を整備し制度をつくるだけでは問題は解決しないという理解が背景にある。

学生と接していても、驚くほど意識が変わっていないことに愕然とすることがある。「自分の身体は自分のもの」と頭では理解しているが、パートナーとの関係のなかで、自分の身体を大切にしている行動ができているのだろうかと感じることは多い。そうした経験から、ジェンダーの授業では、「身体を自分に取り戻す」「自分自身を自分で定義する」「女性であることを祝福する」の3点を強調するようになった。自分の身体は自分のものであることを他人との関係のなかで主張し実現し、「他者の視線」を基準にするのではなく、なりたいたい私は自分が決める。これは、「性と生殖に関する健康と権利（リプロダクティブ・ヘルス／ライツ）」という課題にも深く関係している。包括的性教育の必要性も痛感する。

「北京+25」という貴重な機会をきっかけに、日本でジェンダー平等を前進させるための意思とパッションを集めたい。



## PROFILE

みわあつこ：日本赤十字社外事部、国連女性開発基金（現 UN Women）アジア太平洋地域バンコク事務所、（公財）世界人権問題研究センターにおいて、ジェンダー、開発、人道支援、人権分野の様々なプログラムの実施支援や調査・研究に携わってきた。2017年より（一財）アジア・太平洋人権情報センター（ヒューライツ大阪）所長。国連ウイメン日本協会副理事長。2019 C20共同議長。（一社）SDGs 市民社会ネットワーク共同代表理事。